

町医者だより

平成26年10月号

＜発行・お問合せ先＞

おおわだ内科呼吸器科

院長 大和田 明彦

市川市南八幡4-7-13

ヤソビル本八幡2階

JR本八幡駅南口(シャポー改札口)

2分ミスタードーナツ並び

ヘアサロンAsh向かいビル2階

電話047-379-6661

おおわだ
内科
呼吸器科

喘息の悪化のパターン

喘息の一つの特徴は、季節の変わり目に、咳や痰がらみ、息苦しさなどの呼吸器症状の悪化を見るとことです。これを喘息の「増悪」と言います。その引き金は、軽い気道感染(風邪)だったり、湿度の低下や寒暖差だったりします。10月から11月もそんな季節の変わり目にあたります。今月は1999年にアメリカ呼吸器学会誌に発表された「喘息の増悪」というタイトルの論文(AJRCCM)を紹介いたします。

増悪の時間的な経過

喘息患者さんを4群に分けて治療しています。吸入ステロイドであるパルミコートだけを1日2吸入している群、1日4吸入している群、吸入ステロイドと長時間作用型気管支拡張剤(LABA)と一緒に吸入している群(パルミコート1日2吸入+LABAの群とパルミコート4吸入+LABAの2群)です。その当時はまだ吸入ステロイド+LABAの合剤であるシムビコートがなかったのかそれぞれを個別に吸入しています。言い回しは複雑ですが、吸入ステロイド単独群と吸入ステロイド+LABA群での比較です。喘息の「高度の増悪」の定義は、医師が症状の悪化から内服のステロイドの投与が必要と判断した場合か朝のピークフロー(息を吐く最高スピード)が安定していた時期に比べて30%以上低下した場合です。1年間患者さんに朝夕のピーク・フローを測定してもらい、さらに喘息の状態を0点から3点で自己採点し記録していきます。

結論を箇条書きすると

- ①気管支拡張剤(LABA)が入っている方が増悪前のピークフロー値は大きいですが、増悪時のピークフロー値の低下量は4群とも同じだった。
- ②朝夕のピークフロー値は増悪10日前から3日前まで緩やかに低下し、2日前からは急激に低下した。同様のパターンは、呼吸器症状の悪化やメプチンエアなどのベター気管支拡張剤の吸入使用頻度の増加にも見られた。
- ③増悪の判定は、症状の悪化によって医師がステロイド投与を必要と判断した場合が73%を占めて、ピークフロー値の低下によって判定された場合よりも多かった。すなわち、増悪は症状の悪化で判断することが多いということです。
- ④内服ステロイドの投与後2日間で速やかにピークフロー値や日中の喘息症状の改善が見られ、その後はゆっくりと元の状態に落ち着いてきます。

これらの観察から導かれる結論として

- ①治療薬にかかわらず増悪するときの呼吸機能の低下や症状の出方に差はない。
- ②増悪のピーク(今回の論文では、夜に喘息に関連する症状で目が覚める状態を一番ひどい状態と設定しているので、経験したことがある方も多いと思います)から2日前に内服ステロイドを服用することがポイントであることを示しています。

要するに早めの対処をすることが肝要で、内服ステロイドを事前にお持ちいただく根拠となる論文です。